

2003年マテック博士講演会から2009年一般社団法人化まで



笠松滋久
司会進行



奥本寛



神庭正則



有賀一郎



大島渡



藤原圭介



松本幸生



永石憲道

マテック博士講演会(2003年)と 関西支部(当時・大阪支部)の 設立(2004年)

笠松 ● 2003年のマテック博士講演会は東京と大阪で開催しましたが、関西支部（当時・大阪支部）設立以前の大きなイベントでした。これを運営するための実行委員会を担っていただいたメンバーが大阪支部立ち上げの中心になりました。

藤原 ● マテック博士講演会は、まだ支部ができる前で、大阪にいる街路樹診断協会のメンバーは非常に少なく、基盤が脆弱な状況の中で講演会のメニューを考えたり、運営体制を考えたりするのに、当時の日本樹木医会の大阪府支部に協力していただきました。この協力依頼の経緯は、私はよくわかっていなくて、

たぶん笠松さんがいろいろ動いて、当時の支部長の澤田さんをお願いしたのではと思います。そして、相当なマンパワーをかけて運営にも協力をいただいたことを覚えています。当時の資料を見ると実行委員が15名でした。街路樹診断協会のメンバーに加えて、日本樹木医会の大阪府支部の幹部の方々に、それぞれ役割を担っていただいたという状況でした。中身については、ほぼ東京講演のプログラムをそのまま踏襲したと思います。

笠松 ● 当協会の大阪支部設立は2004年で、マテック博士講演会は2003年です。大阪講演会の開催には、東京で当協会の活動をしていた日比谷アメニスさんや内山緑地さんの支店のメンバーが、動いたということでしょうか。

藤原 ● そういことですね。大阪を基盤とする樹木医がいる会社は、まだメンバーには入っ

ていなかったはずですね。

笠松 ● という状況から 2004 年に支部が設立されていくわけですが、これはマテック博士講演会が、一つのきっかけになったのでしょうか。それとも、浜寺公園の調査など、たまたまそういうタイミングに行政側も樹木診断に関心を持ち始めたからということなのでしょうか。

藤原 ● 浜寺公園の関係は、大阪支部ができる前段階でした。やはりそういうものの受け皿としてのなんらかの基盤が必要だろうと、大阪支部を作ろうということになりましたね。ちょうどいろいろなことが起きる段階で、支部展開をしようというのが街診協全体の意思だったと思います。

笠松 ● 最初の支部メンバー、わかりますか。

藤原 ● 正しいかどうかよくわからないのですが、京阪神グリーン、西川造園、小山造園など大阪が基盤の会社が最初から入られていたと思います。あとは支店メンバーで内山緑地、東光園緑化、東邦レオ、日比谷アメニスというメンバーです。

笠松 ● 浜寺公園等で調査をやり始めたということはありましたが、当時、私の印象では、関西では街路樹診断、あるいは倒木危険度診断というのは、ほとんど耳にすることがなかったのですが、よくメンバーに集まっていただけでしたね。

藤原 ● 入会勧誘のために会場を借りて、当時、樹木医がいる会社に呼びかけをして、こういう会があるので参加いかがでしょうかと説明会を開いた記憶があります。

笠松 ● 浜寺公園の調査は、支部ができる前にはもう始めていて、数年かかってやられていましたね。

藤原 ● そうですね、2003 年（平成 15 年）、2004 年が最初。そこから 4 年間か 5 年間、やりましたね。最初の時だけは、受託者がコンサルでした。そのコンサルからの相談でこちらに業務が来たという経緯がありました。

笠松 ● そのために当時の神庭会長が浜寺まで何度か足を運ばれていることは聞いておりました。

藤原 ● そうですね。私も一緒に行って、ずっとついてもらって診断の仕方を教えてもらっていたことがありました。

笠松 ● 関西支部も研修熱心です。浜寺でも研修した記憶がありますが、府の関係の方を巻き込んで実施したのが数度。どういう自治体に関心をもたれて、どういう研修をやってこられたのでしょうか。

藤原 ● 大阪支部が発足したその年の暮れに第 1 回の研修を行っています。その時の参加人数が 80 人ほどで、おそらくですが、半分ぐらいが自治体の関係者だったと思います。残りが樹木医関係者、民間の企業の方が多かったと思います。浜寺公園は府営の公園で、大阪府の造園職の方が診断業務、危険度診断に非常に強い意識をもたれていました。その数名の方が、浜寺公園にいらっしゃったり、そこから転勤でいろいろ異動されたりしているのですが、その異動された先で診断業務を動かしていくという状況がありましたね。それで、我々としても研修をやることで、まずは、診断業務の認知度を上げるのが一番必要だろうということで、研修事業を何回か行いました。集まっていたいたのは周辺の自治体の方々、特に大阪府内の方が多かったように思います。

2003年、マテック博士講演会

笠松 ● 2003年5月の一大イベントは、マテック博士講演会です。永石さん、なぜ、マテックさんになったのか覚えてますか。

永石 ● 話はレジストグラフ研究会の頃にさかのぼりますが、1996年12月に「シュトゥップシの樹木入門」が堀氏の翻訳で日本樹木医会から発行され、VTAについても、渡辺先生が「マテックさんが…」という話をいつもされていたのです。また、神庭前会長の思い入れも大きく、ぜひビッグネームを呼びたいということで、アレックス・シャイゴさんと呼ぶか、マテックさんと呼ぶかという話が、たぶん1回、2回はあったのです。シャイゴさんは、当時すでにご高齢で、アメリカにいらっしゃるので、今後こちらから訪ねていくこともできるかもしれないということで、マテックさん呼びたい、呼ぼうということになったのではないかなと思います。あと、レジストグラフを当時、東邦レオで輸入していました。レジストグラフの学術的な背景をつくっているのが、マテックさんだったということもあり、メーカーのルートからお声掛けができる人ということで、マテックさんだったのではないかなと思います。

笠松 ● いきなり本家本元を呼べたというのはすごいことです。有賀さんにお伺いしたいのですが、マテック博士講演会のパンフレット・申し込み用紙は、有賀さんがデザインし作成して、「樹木からのメッセージに耳を傾けよう」というタイトルも、たしか有賀案だったと思うのです。有賀さん、このあたりの意図、経緯を教えてください。

有賀 ● 有賀案かもしれませんが、その時は、

まだ街路樹診断協会で主力になれるような人が少なく、なんでもやらなければ成り立たなかったためだと思います。私は当時、日本樹木医会の広報部会で、山本三郎さんの下で広報委員やツリードクター編集委員をかなり一生懸命やっていました。日本樹木医会の広報委員としてパンフレットなど作っていましたから、必然的に「有賀やれ」あるいは「自分がやる」になったのではないかなと思います。このパンフレットを読んでも、確かに自分の文章だとわかるので、私が考えたのかなと思います。読み返してびっくりしたのは、この段階で都市樹木という言葉を使っているのですね。何回も出ています。

基本的にパンフレットを作ったり、タイトルをつけるということは、まさに広報であって、あまり、厳密な意味で中身を作っているという感じではありません。広報だから、自分たちの存在を示そうとか、街路樹診断協会が外国の大物先生を呼ぶことができるんだぞ！とか、ビッグサイトで講演会を開けるほどの組織なんだぞとかですね。どちらかというと、どうしたらPRできるかということになると思います。それから、リスクマネジメントや倒木危険判定というものが、まだ樹木医の中で全然理解されてない時代ですから、普通の樹木医と違うことをやっているのだということを示したかったのではないかなと思います。

「樹木からのメッセージに耳を傾けよう」というのは、マテックさんの本の中に同様の言葉があったのではないかなと思います。

永石 ● 千葉大の藤井先生が翻訳された本のタイトルが「樹木からのメッセージ」です。マテックさんが、「樹木からのメッセージ」と書いて

いるということではなかったと思います。

有賀 ● きっとそういうものを参考にしてつけたのでしょいうぐらいで、記憶にないですね。

笠松 ● 今一度この文章を読み返して、都市樹木と出てくるのにちょっと驚いています。有賀さんがタイトルを「樹木からのメッセージに耳を傾けよう」とつけられましたが、かなり早い時期から街路樹ということだけでなく、都市樹木というものを意識されていたのではないかなと思いましたが、都市樹木についてはいかがでしょう。

有賀 ● たぶんそうだろうと思います。そうとしか考えられないですね。都市樹木という言葉のほうが街路樹よりいいのではないかなと、たぶん思っていたのでしょうね。それで思い出しましたが、協会の英名 (Urban Tree Diagnosis Association, Japan) は、初の海外交流であったマテック博士講演会のためにつけたものでした。

笠松 ● 2003年当時、バブルが弾けて、造園界の発注量もだんだん減ってきた中でマテック博士講演会を企画し開催しました。マテック博士講演会に、人数は多く集まったと思いますが、2000年から2003年頃の造園界の時代背景を踏まえて、客観的に見てどういう意味があったのかということ、奥本さんにお話いただければと思います。

奥本 ● 2003年頃はバブルが崩壊した後で、建設業界にしても造園業界にしても大変な時期だったと思います。樹木医に関しても、そのようなことが具体化してくる時期でした。建設業界の中のわずかな部分ですけども、造園業界としても建設投資がたしかピークで80何兆円あったのが、ちょうどその頃にはもう50

兆から60兆円ぐらいになり、これからいったいどうしていったらいいのだろうと、先行き不安な時期だったと思います。全体の流れとしては、建設投資からさらにその先、街の管理、委託工事や街路樹の剪定など継続性の高い仕事のほうへ、もう少しシフトしていくべきだろうなどと考えていたところに、街路樹診断がいろいろな形で具体化してきて、これは全国の街路樹の本数を考えると、きっといい事業になっていくのではないかと、というようなことで、かなり真剣に、取り組み始めた時期だったと思います。

笠松 ● マテック博士講演会は、そういう時代背景において、なんらかのインパクトがあり、また、どういう意味付けがあったのでしょうか。

奥本 ● そうした状況でいろいろ模索している中で、造園業界関係でも対症療法的に立ち上げた協会がたくさんありましたが、いずれも立ち上がっては消えるような協会が多かったように思います。でも、この診断協会は、当時私が受けた感触では、日比谷アメニスが新しいことを始めたぞと、なにか大きな仕掛けをもって始めたのではないかなという捉え方をされていましてね。だから、協会も10社ぐらいで始まったと思うのですが、大手もかなりサッと参加してくれて、それまでの造園業界にあった協会から比べると、明らかに違う目的をもち、しっかりした先行きを見た協会を立ち上げ出したな、これはちょっと無視できないなという反応を感じていました。

その後このマテックの講演会が企画されたのですが、これも結果的に業界へのインパクトは強かったと思います。行政関係者も多数招待し、ビッグサイトでやろうということに

なり、1000人集めよう、やるのだったらきちっとした、インパクトの強い講演会にしようじゃないか、ということで繋がってきたのだと思います。

これについては、前回も話したと思いますが、診断協会を立ち上げた時点で、必ず法人化していこう、街路樹診断は将来性のある事業なので、街路樹診断士という資格制度を確立し「街路樹診断士」の名称を商標登録することもベースにあったと思います。法人化することによって社会に認知していただいて、やっていこうじゃないか、と進んできたと思います。それに協会の認知度を高めるため、本当にマテックさんの技術、知識には助けられました。

笠松●本当にインパクトのある方でしたね。風貌から発言から…。街路樹診断協会が初めて海外から招いた先生が、こんなインパクトのある人というのも、私自身もびっくりしてしまいました。そんなマテック博士ですけども、様々なエピソードを残していただきました。有栖川宮記念公園でしたか、成長錐を打つスピードの速さに驚かされました。新しい学びもいくつかありました。多年生キノコの場合、キノコの年輪を見ることで、樹体の腐朽状況が推測されるとか、あるいはライオンテイルの危険性などもその時に教えてもらったことです。空港の出迎え時からレクチャーが始まり、案内した絵画館前のイチョウでもレクチャーを受けたり、皇居へ行って盆栽を見てもレクチャー。もちろんビッグサイトで講演会をして、有栖川宮記念公園で実地検証をやり、それから大阪講演に移って、京都に行き視察しながら京都でも現地研修が始まりました。永石さんはこの一連の日程に参加されて

いましたよね。印象、エピソード、あれば教えてください。

永石●まずはダイナミックでしたね。講演会で壇上の移動の幅が広い。たぶんビデオで撮っていたら撮りきれないぐらいの幅で、右から左に移動する。あと、手もバンバン動かす人でしたね。イメージ戦略を非常に重要視されていたのだと思いますが、私服を見なかったですね。赤い革のブーツと、赤い革のベストと黒いシャツ、黒いズボン。これでずっと統一していて、さらにはあの顔に黒か黄色の丸いタブロイドメガネをずっとされていて、非常にイメージ戦略がしっかりされた方なのかな。常時ほぼほぼ同じ形のメガネをかけられていた記憶があります。それぐらい印象に残る感じでしたね。

日本の歴史背景とかその辺はあまり考慮されずに講義いただいたところもあります。京都のお寺さんで、かなり立派なクスノキだったと思いますが、その木を前に、この枝は危ないから切っちゃえと。すごい大枝、力枝ですね、切りなさいって指示を出したりとか。他には、滞在期間がほぼ1週間近くでしたので、かなり打ち解けていただけていたのだと思いますね。大阪会場でしたか。笠松さんが壇上においでと呼ばれて、木のモデルかなにかを指示されて「立っている、立って木の形をしろ」と言われて。普通は事前にこういうことをやるよと関係者に話をしておくものです。あれはアドリブだったのですか？

笠松●事前には私、聞いていませんでした。

永石●そういう意味でも偉い先生だったと思います。この時、名誉会員の盾を用意してお渡ししました。そういう取り組みも初めてで、それ以降、海外から先生方を招くたびに、名

誉会員の盾を用意する形になったと思います。その後2008年オリバー・ウィテックさんがマテック博士の紹介で来られた時には名誉アドバイザーという盾をお渡ししています。非常にありがたいことに、ウィキペディアにクラウド・マテック博士が載っており、表彰来歴のところに、日本の診断協会から表彰を受けたというのがちゃんと記録に残っているのです。これはたぶん海外に向けて診断協会の名前が出てきた初めてのケースなのではと思います。Urban Tree Diagnosis Association Japan と表記されています。

笠松 ●なるほど、そんな紹介があったんですね。有賀さん、実際にマテックさんの講演会后、発注量とかそういうものにはなんらかの影響はあったのでしょうか。

有賀 ●なかなか難しい質問ですけど、相当にあったのではないですかね。東京都とだけやっていた街路樹診断業務が、全国の自治体、私は神奈川県ですから、神奈川県、横浜市、相模原市、座間市などの自治体から相談を受け、企画書を提出したり、それぞれの第1号や初期の診断業務をやりました。東京講演、大阪講演に自治体の担当者が来られていましたね。少し関係があるとか、話があった役所に講演会のパンフレットを配ったかもしれないのですが、何人も会いました。結構、全国的に話がありました。大阪や奈良のほうにも行ったことがあります。

笠松 ●神奈川県は東京都に次いで早くから街路樹診断を導入されていましたが、大体この時期からになるのですか。

有賀 ●平成13年度(2001年)には県から第1号が発注されています。東京都よりも数年ずれるだけでさらに発注機関、発注量が増えて

います。

笠松 ●たしかビッグサイトでの集客が800人強ぐらいだったと思うのですが。

奥本 ●800人強だった。最後に一所懸命数えた覚えがあります。座席を見ながらこのぐらいは入ったねと。

笠松 ●関西が定員300人のところオーバーで、立ち見も出て340人ぐらいですね。東京と大阪合わせて1000名は超えていた的呢。そういうインパクトがあって、診断が広まっていくことに、やはり寄与していた的呢。

2003年、九州支部設立

笠松 ●2003年(平成15年)は九州支部と関東支部が設立されています。松本さん、九州支部の設立は関西支部より少し早かったですが、設立の経緯でご存知のことはありますか。

松本 ●なぜ九州のほうに関西より先だったかは私もわかりませんが、平成15年の秋頃に、神庭さんと笠松さんのお二人が福岡にいらっしゃって、日本樹木医会福岡県支部の当時の支部長の白石先生を交えて、ちょっと地元には挨拶ということで、そういうお話がありました。福岡で九州支部を立ち上げるのに窓口になって一番尽力いただいたのは、当時の内山緑地の古賀九州支店長でしたね。その方が音頭をとって、当初6社だったと思いますが、九州支部の会員としてスタートしました。当時、日本樹木医会の福岡県支部の中では、東京からの新しい団体に対していろいろと声はあったのですが、6社でスタートしました。

笠松 ●九州大学の白石先生のところに神庭さんとお伺いした覚えがあるのですが、神庭さん、用件は何だったか覚えていますか。

神庭 ●私もはっきり覚えていないのですが、愛知の EXPO 後に、九州もだいたい樹木医が増えてきているので行かなくてはいけないのではないかと、たしか自然とそのような雰囲気になっていったような気がします。それで白石先生のところにご挨拶・ご相談に行ったのだと思います。松本さんも関係してくれたような気がします。

松本 ●九州グラウンドの当時の社長の前田准が、日造協の九州支部の事務局をやっているということで、いろいろな会社の幹部の方に顔が利くということで、立ち上げるに当たって、前田が事務局をやろうという話になり、私が実際に事務局の仕事を行うようにという話がありました。それで当初、そのご挨拶に来られた時から、私が同席させてもらったのだと思います。補足しますと、マテックさんの大阪講演を、私は全然知らなくて参加もしてなかったのですが、その年の6月頃だったと思いますが、福岡の NHK 支局の近くで昼間にケヤキの大木が倒れる事故があり、すぐにニュースで流れて、結構、注目を集めた直後だったと思います。

福岡市に谷口さんという職員の方がいらっしゃって、マテックさんの大阪講演を聞きに行かれていて、街路樹診断の事業化をその方が中心になってされました。そういう経緯で、本当にマテックさんの大阪講演が、福岡では一つのきっかけになったのではないかなと思っています。

谷口さんは現在は福岡市緑のまちづくり協会という市の外郭団体を退職され、アイランド中央公園で緑の相談員をなさっています。

笠松 ●それは有賀さんの言うとおりの講演が影響力があったということですね。その後、松

本さんが九州管内のことを全体的にまとめて、積極的に活動をされ、あれよあれよという間に関東支部などよりも、ずっと支部らしい活動がなされるようになりました。支部設立の話があった直後に、神庭さんと丘の上の動植物園で講習会を行い、飯塚さんも来られました。結構な人数の人が集まって盛大にやられた記憶があります。九州支部では頻りに研修会をやられていますが、あれが第1回だったのでしょか。

松本 ●そうです。平成15年の秋に九州支部ができて、平成16年のたしか5月頃だったと思いますが、第1回の支部主催の技術研修会を福岡市の植物園で開催しました。あの時も80名ぐらい参加者がありました。その後も続けており、毎年1回から2回、九州全県を技術研修会で回り、沖縄にも行きました。都合十数回かやっていると思います。

笠松 ●継続されているのがすごいことだと思います。2003年（平成15年）に支部が設立されて以後、研修会などをされていますが、福岡市の谷口さんが街路樹診断の事業化に動き、ケヤキの倒木があったこと以外に、マーケットというか需要はあったのでしょうか。

松本 ●福岡市は特にそういった事故があったことと、それ以前にも台風が何度も来て、市内の街路樹も相当、何千本も倒れたというようなこともありました。ご本人から伺った話では、谷口さんは事故があった時などに交渉される立場にいらっしゃって、非常に苦勞されていたということで、やはり公共事業として、倒木を未然に予防するような仕事の必要性を、すごく感じられていたのではないかなと思います。ただ、残念なことに他の自治体では福岡市ほど仕事は現在でも発注されてい

ません。福岡市はずっと継続して、もう15～16年ぐらいになりますか、今も、再診断、再々診断をずっと行っています。

一つの方針として、街路樹診断協会の九州支部は日本樹木医会の各県支部とは、あまりバッティングしないように、心がけて努めています。もし協力できたら下請けでやるというようなスタンスでやっていますので、仕事量的にはそれほど多くないのが現状かと思えます。

2004年、街路樹診断保険制度

笠松 ● 2004年（平成16年）に街路樹診断保険制度を開始しています。保険制度導入の経緯、どういう意図だったのでしょうか。

大島 ● 街路樹診断協会の会員でなければ入れない保険ということで、発注者からすれば、そういう保険に加入している事業者が業務受託してくれたほうが、安心して業務を発注できるという話を聞いたことがあります。受け皿としての信用性を高めるということで、作られた保険だと思います。

神庭 ● 診断後に倒木が起きた時に、誰が責任をもつのだ、会社が責任をもつのかという話が上がりました。会社の中での担当者は樹木医で、個人や会社の負担がかなり大きくなるのではないかという危機感をもつ会社が増えると協会も成り立ちません。診断をする人も減ってくるのではないかということで、当然のこととして保険があることが普通だとなりました。公園関係で似たような保険がたしかあったかと思えます。

奥本 ● 日比谷アメニスの親会社の日比谷花壇のグループ会社に、東京海上火災だったか、

保険の代理店をやっている会社がありました。

大島 ● 株式会社フレネット HIBIYA です。

奥本 ● 役員会で保険の話が出ていたので、当時の事務局の中澤さんが、あまりコストもかけられない状況だが、こういう考え方で、こういう瑕疵担保できるような街路樹診断業務に特化した保険をオリジナルで作れないのかとフレネットへ相談に行ったのですね。それを持ち帰って、何回かいろいろな条件を詰めていって、当初は東京海上と保険の叩き台を作ったという経緯があったと思います。

笠松 ● 樹木の診断に対して保険が適用されることになったのはとても画期的なことです。街路樹診断が始まるまでは樹木が倒れるのは天災扱いみたいなもので、自然に折れるものだという認識でしたが、保険対象になりました。街路樹診断協会が保険制度を適用してから、日本樹木医会なども診断や治療に対する保険制度を導入しています。街路樹診断に対して保険を適用できたというのは、当時の事務局の中澤さんがなかなか大変な交渉をされたおかげだと思います。

診断する立場としても保険があったほうがいいよねという要望は、あったのでしょうか。

神庭 ● 保険がというわけではなくて、責任がどこに行くのだ、というような話でした。その段階でたぶん奥本さんが、いろいろなところを探してくれたのだと思います。公園の遊器具には保険があるという話をしていたところを、奥本さんが動いてくださったということでした。

笠松 ● これは素晴らしい一手だったと思います。責任の所在がどこかというのが非常に重要で、それがやがて街路樹診断士になるわけです。今、外部では、診断協会を閉鎖

2005年、
東京都の元気な樹木づくりPTなどに
参加

的な企業集団だというふうには、ちょっと変な見方をする人が中にはいるかもしれないですが、そういう人たちに対しても理由が付きまします。今から振り返っても、本当にこの責任の所在というものに自ら取り組んで、その担保として保険を作っていて、これはすごい一手だったなと思います。実際、保険適用されたことはありますか。

大島 ● 今までに適用されたことはありません。公共事業において診断した樹木に倒木が発生していても、実際のところは官庁、所有者のほうで圧倒的にお金を持っているということもあり、我々がそれに対して、官庁から追及されるということは、今のところ発生していません。一次的にお金を被害者に払うのは、樹木の所有者です。官庁なり民間の所有者がまずお金を被害者に払います。その後、その所有者から診断協会の診断者に診断が間違っていたのではないかとこの疑義が発生し診断者の診断に瑕疵があった場合、この保険が適用されるという考え方です。とはいえ判定が記載されていないような問題のあるカルテには保険は適用されないの注意が必要です。

笠松 ● それにしても保険料は安すぎませんか。

大島 ● そんなに事故はないだろうということで、考えたのではないのでしょうか。

笠松 ●すごい計算力ですね。そのとおり支払いは生じていないです。

大島 ● 起こっていないです。木を所有しているのはだれかということを考えて、保険会社はやっているのではないかなと思います。

笠松 ● 2005年の東京都の元気な樹木づくりプロジェクトチームにはどのような経緯で関わったのでしょうか。また、このプロジェクトは何のためのどのようなプロジェクトだったのでしょうか。私は、このプロジェクトは、街路樹から都市樹木へのきっかけになる最初の出来事ではなかったか、というようにみえています。

有賀 ● 我々は誘われたので参加しました。基本的には街路樹診断と街路樹を担当した職員の方が公園に戻って、公園でも同じことをやろうというようなことで始まったものだと思います。しかし、街路樹のように危険だから伐採するのではなく、木を元気に育てていこうという方向にもっていったものだと思います。そのため「元気な樹木づくりプロジェクトチーム」という名前だったと思います。やっていることはほとんど同じなのですが、元気な樹木をどんどん育てていこうという趣旨だったと思います。

笠松 ● 国土交通省では5年ほど前に、道路緑化技術基準の改訂の次に公園樹木の維持管理の手引を出していますね。維持管理マニュアルでしたか。それを遡る十数年前に東京都はもう取り組んでいたということなるのでしょうか。

有賀 ● 実際に東京都の公園部局から樹木診断を受けています。私は何本かの業務をやらせてもらい、公園内の樹木診断を街路樹診断の方法でやっています。

笠松 ● 都市樹木とかアーバンツリーというの

は、道路緑化技術基準の改訂などの前から徐々に街路樹以外の診断をするきっかけがあったということですね。

有賀 ● そうですね。初期には公園や緑地、緑道、墓地、地域全体など結構あったような気がしますね。これらの樹木診断は多少工夫しますが、基本的にやっていることはまったく同じです。

笠松 ● このプロジェクトは最終的にどのようにまとめられたのでしょうか。

永石 ● たぶん冊子が東京都で内部配本されたのだと思います。協会でその副本をもらっているかどうか。各公園事務所さん、今は東部事務所と西部事務所だけですが、そこには置いてあるという話で、たぶん代々の維持担当の方が見られて、それから発注を出していると思います。その後、東京都の街路樹のマニュアルが変わってきますね。それに従って、新しいものを取り込むということで、今はもう街路樹のマニュアルが使われている状況だと思います。

笠松 ● 私は一度読ませてもらって記憶に残っているのが、対象が公園だけではなく動物園や植物園など、都の関連する施設を一通り網羅していたような印象があるのですが、そういう内容でしたか。

永石 ● この取り組みを行った直後ぐらいには、少し広い敷地の公立病院からも依頼があったということは聞いています。その後はちょっとわかりません。

大島 ● 協会に冊子が保存されていました。「18年度版・元気な樹木づくりの手引き」、「元気な樹木づくりプロジェクトチーム報告のサクラ植栽・管理の趣旨」（平成20年）がこのプロジェクトチームから出ています。サクラの

ほうは、どういう処置をしたらよいといったことを書いてあり、「18年度版・元気な樹木づくりの手引き」は、当時の診断マニュアルの内容と、移植適性度診断とか、成木初期の定義についてとか、そういうマニュアルに付帯するような情報などを集めて作ってあるので、特にこれがすごくなにか新しい内容が入っているというわけではありません。公園なので、やる場所を選ばないといけないなどが記されています。そのほかの部分はいろいろ過去の街路樹診断の知見を集積しているな、という内容でした。

九州地方建設局の 街路樹リスクマネジメントの 手引きについて

笠松 ● 街路樹診断協会は、東京都との関係性から生まれたというのは間違いないですけども、なにか新しい計画、規格を作るときに呼ばれるというのは、非常に良いポジションだと思います。

松本さん、これと同じようなことが、2006年か2007年に、九州地方建設局の街路樹リスクマネジメントの手引きが出版されるときに、九州支部の皆さんが関わったということが記録に残っているんですけども、記憶にございますか。

松本 ● 九州地建が診断マニュアルを作るということで、オブザーバーとして参加したのです。それは、もともとマニュアル作りはコンサルタントが受けていたのではないかなと思います。コンサルタントの担当者から相談を受けて、オブザーバーとしていろいろな会議に参加し、そのマニュアルの詳細部分などについて協力するような形でしたが、街路診断

協会の九州支部としてそれについてなんらかの関わりをもったというものではないです。会社がコンサルタントからの仕事として受けたので、私に関わったということになります。あまりいい思い出がありません。オブザーバーということで会議での発言も止められていました。

笠松 ● 街路樹診断協会の総会資料の年次報告に、これが記載されています。だから松本さん個人だったのかもしれないですが、その時に街路樹診断協会の名前と一緒に併記されたのかと。そうでないと協会の総会資料には載ってこないと思うのですけども。

松本 ● 九州支部の総会の報告を、全体の総会の時に東京で報告したと思うので、私が作った資料だと思うのですが、九州支部全体として関わったことではなかったです。

笠松 ● ただ、九州地建がリスクマネジメントについて言及するというのは、初めてのことですね。それ以前にそういう本やマニュアルはなかったですね。

松本 ● ありませんでしたが、コンサルから事前に資料としていろいろ見せてもらった中に、九州地建管内のいろいろな事務所で、試行みたいなことをされている資料がありました。それは、日本樹木医会支部に所属されている樹木医の方が試行したもので、その結果などを一覧表として見せてもらったことがありました。それを見て驚いたのが、判定のやり方がバラバラなのです。詳細はわかりませんが、写真を見ただけでも、これは明らかに危なそうな状態なのに、大丈夫、健全であると。とにかく、全然樹木の見方が統一されていないというような試行結果が出ていたので、それをもうちょっと平準化するようにコ

ンサルには言ったかと思うのです。

簡易診断について

笠松 ● オブザーバーとしてのアドバイスですね。東京都の元気な樹木づくりプロジェクト、九州地建のリスクマネジメントがあったちょうどこの頃、簡易診断研究の開始が、総会資料の中に出てきます。

神庭 ● 簡易診断については、東京都の山本三郎さんが関係していたかもしないですね。より簡単に、より早く、おおむね予想をつけて診断を行う目の付けどころです。各項目ごとにピンポイントで行うカルテを作ってみないかという話があったのを覚えています。機器診断をするまでもなく危険な木をピックアップしてしまいたいと、そういった視点で作られたというようなものです。

笠松 ● 今現在行われている点検や予備診断とはまったく違う目的の診断だったわけですね。

神庭 ● そうですね。危険な木を何しろ見つけてしまいたいというところですね。

笠松 ● 揺すったら揺れる。だからレジストを打つまでもないだろうというようなことですね。

神庭 ● はい。また、開口が大きすぎるとか、見た目にも空洞が深くめり込んでいるとか、ベッコウタケが出ているとか、そういった木だけでも拾い出したい、たしかそうだったと思います。

永石 ● 簡易診断に関して名簿だけですが、東京都と公園協会さんがほとんどのメンバーを占めていて、いろいろ検討していたみたいですね。たぶん街路樹ではなくて元気な樹木づくり PT と連動して行われた、いわゆる直営の

職員さんたちが悪いものを先に見つけてくるための診断、その参考資料を内部で作られていたのかなと思います。

有賀 ● たぶん、山本三郎さんがやっていたのです。公園協会に行って関係者を集めて講演したり、簡単に職員でできるようにするため、街路樹でやってきた内容をみんなに教えているのだというような話をしている、それを簡易診断と言ったかどうかははっきりわからないのですが、そんな話を聞いたことを覚えています。

2006年、 東京都のマニュアル平成18年度版 5段階評価

笠松 ● この簡易診断が2005年。翌年の2006年には東京都のマニュアル第3版となる平成18年度マニュアルが出ています。第2版は第1版を山本三郎さんが一所懸命作られたところから、わずかな改訂だったのですが、第3版は3段階評価から5段階評価に変わりました。それはなぜですか。

有賀 ● 健全(A)、やや不健全(B)、不健全(C)。実際に診断してみると、やや不健全の幅がすごくあります。Aに近いBからCに近いBまであり、なんとも言えないようなのがたくさんありました。そのため、やや不健全(B)の中に1,2,3があっただけではないだろうか。A、B、Cの基本は変えずにBの中に3段階を作りB1、B2、B3という形にし、5段階にしたわけです。

笠松 ● 第1回座談会の時に山本三郎さんが、評価ランクをあまり細分化すると説明するのも大変だし、簡単なほうが良いという話をされていました。実際に5段階に変わり、現場

で診断していて、どちらのほうがやりやすかったですか。

有賀 ● 3段階評価ではB(やや不健全)があまりにも幅がありすぎました。街路樹ではAといえる健全な木はあまりなく、Bばかりになってしまうので私は5段階がやりやすかったです。診断業務を開始した初期には、Cが10%、15%と出ていました。

5段階になった頃、未熟な樹木医たちが診断をやるようになってきました。診断業務の受注競争が激化して、低価格で競争に勝ち、全然経験のない協会員ではない樹木医が診断をやるようになってきました。そうするとBはB1、B2、B3で、B2が真ん中なわけで、未熟な樹木医はほとんどが真ん中を選択しB2ばかりになってしまったのです。簡単に言うと「どちらとも言えない」というような答えです。そうすると発注者である東京都は「良いか悪いかを調べてくれ」と頼んでいるわけですから、それがほとんど全部「どちらとも言えない」という答えで、それは許しがたい、5段階ではダメだ、良いか悪いかどちらかにしろということで、4段階になったわけです。4段階なら良いほうが上の2つ。悪いほうが下の2つとなります。そもそも、都内の街路樹は「健全」はあまりなく、ほとんどが「健全に近い」です。それで「健全か健全に近い」というふうにまとめて5段階を4段階にしたわけです。診断をきちんとできる人がやっていたら5段階でもいいのだと思うのですが、どちらかにさせるという強い意志が東京都側にありました。私はその当時、抗議しましたが、4段階じゃなければダメだと聞いてもらえませんでした。それは今思うと確かにそのとおりで、4段階ぐらいがちょうどいいと思うようにな

りました。

笠松 ●なるほど。4段階になったのはいつからですか。

大島 ●平成26年度のマニュアルからだと思います。

笠松 ●マニュアルとしては大きな変化だったと思います。2006年に、第3回の改定で5段階になった時から東京都の認定の街路樹診断講習会が始まっています。それは東京都からの要望だったのですか。

大島 ●そうです。診断をする人が増えてきて、診断者の知識が重要になってきたということではないでしょうか。それなりに研修を受けた人ではないと、入札の参加者としても不適格だということで、協会で研修をやってくださいと。ぜひ協力してくれないかということだったと思います。

笠松 ●なるほど。いや、すごいなと思います。これは、結構歴史もありますね。15年前に一緒に始まっているっていうことですね。

大島 ●はい。ずっと欠かすことなく毎年続いています。

有賀 ●その15年前ぐらいがひどい低迷が始まった時です。品質が落ちたのです。

笠松 ●なるほど。それを担保していくために最終的には街路樹診断士が生まれていくというようなことになっていくのでしょうか。

有賀 ●そうだと思います。

笠松 ●東京都の街路樹診断研修は、ちゃんと技術的に担保できる人を育成していくという意味では、非常に重要な取り組みだと思います。

2008年、 設立10周年記念国際シンポジウム 「世界の樹木管理とリスクマネジメント」

笠松 ●2007年はあまり大きなことはなく2008年の準備をし、2008年に設立10周年記念国際シンポジウムが開催されるわけです。最初に誰を呼ぼうかという話になった時に、スマイリーさんがすぐ出てきた記憶があります。まずスマイリーさんありきだったと思うのですが、スマイリーさんと街路診断協会の接点は、それ以前にあったのですか。

神庭 ●スマイリーさんはアメリカに本部のあるISA (International Society of Arboriculture) のメンバーで、組織の中では樹木のリスクアセスメント技術でリーダー的存在です。私も1990年頃に東京農工大の渡辺先生に誘われてISAのメンバーになり、会誌が時々送られてきました。会誌には名簿が載っていて日本人は渡辺先生と私、そして他に数名しかいませんでした。そのうちにメールが届き始めました。スマイリーさんがヘッドになっている樹木のリスクアセスメントの話題やISAの大会の開催案内が毎年届くようになったことから私は、日本人メンバーの「Urban Tree Diagnosis Association(街路樹診断協会)」の神庭を名乗り、日本で倒木危険の講演会を開くのでその講演依頼ということでメールのやり取りが始まり、長いやり取りの末、スマイリーさんもああいう笑顔の方ですから、快く引き受けられたと、そういった流れです。

笠松 ●ISAと神庭さんとの接点から、スマイリーさんが浮かんできたという経緯ですね。するとオリバーさんはどういうきっかけだったのでしょうか。この国際シンポジウムはス

マイリーさんとドイツのオリバー・ウィテックさん、それと中国のハン・リーさんの3名を招きました。

神庭 ● オリバーさんはマテックさんと同じドイツのカールスルーエ研究所の所属で、マテックさんルートだと思います。

永石 ● 法律の専門家ですね。マテック博士講演会で法律や事例の質問が非常に多かったので、マテックさんが来られないのであれば、それに答えられる人をお願いしたいと要望を出しました。

笠松 ● 街路樹診断協会設立10周年記念事業としてやろうということで、スマイリーさん、オリバーさんも来てくれるということになって、じゃあ国際シンポジウムだねという話になったのですが、2人招いて国際シンポジウムというのはちょっと言いにくいのではないかと。それで、もうあと1か国ぐらいあったら国際シンポジウムとして大々的に打ち出せるよねというのが理事会の席で話が出たのです。ちょうど北京オリンピックの開催直前だったので、北京オリンピック準備の植栽の総責任者が北京園林科学研究所のハン・リー所長で、たまたま私が接点があったので国際シンポジウムと銘を打つためにお呼びしました。スマイリーさん、オリバーさんと、話の内容が違いましたが、国際シンポジウムになりました。この時のパンフレットも、有賀さんに作成いただいているのですね。

有賀 ● そう言われるのですが、これは作った記憶がほとんどないですね。資料もあまり残ってないです。行幸通りを案内し、私が作った学会用ポスター発表を縮小して渡しました。北京で、それがそっくりそのまま発表されているという話を、笠松さんから聞いたことを

覚えています。

笠松 ● マテックさんの時はビッグサイトでしたが、この時は大胆にも日比谷公会堂でした。ここの定員は2000名です。もちろん2000名は入っていませんが、なんで日比谷公会堂になったのでしょうか。すごく大胆なことをしたなど。

大島 ● 理事会で、やはりやるなら、日比谷公会堂がいいなみたいなことだったと思います。2階席は使わないで1階席だけで。

奥本 ● 日比谷公会堂でやるというのは、造園関係の中でも、日造協が都市緑化大会などをやっていたので、業界のいわばカーネギーホールみたいな感じもたしかあったと思いますね。

笠松 ● 日比谷公会堂でやって一番良かったなと思ったことは、スマイリーさんに日比谷公園でレクチャーを受けたことです。

神庭 ● 日比谷公会堂の長い階段でみんなで写真を撮りました。スマイリーさんも喜んでいったような、そんな記憶があります。

笠松 ● 東京に続いて大阪で開催しました。この時の苦労とかエピソードがありましたらお願いします。このシンポジウムも盛況だったことを覚えています。

藤原 ● そうですね。マテックさんの時も340人ぐらい参加いただきましたが、この時も380人ぐらいの名簿が残っています。いろいろ苦労はありましたが、当時はまだ、街診協の支部の人数は少なく、どちらかというとNPO おおさか 緑と樹木の診断協会(NPO おおさか)のマンパワーが非常に効いてきました。広い範囲にメンバーの方がおいでになるので、その方々からの発信で、盛況な会が催せたのだらうと思っています。

大阪色を出しましょうということで、当時、

顧問になられていた澤田さんをお願いして、NPO おおさかがずっと運営していた「おじいさんの木」のマネジメントについて発表していただき、パネルディスカッションにも参加していただきました。

笠松 ● 大阪は、いつも大阪の特色を出そうとされます。2003年のマテック博士講演会の時、東京のタイトルは「樹木からのメッセージに耳を傾けよう」でしたが、大阪の講演タイトルは「教えてマテック」でしたね。

2004年に支部が立ち上がって、いろいろ苦労はあったと思いますが、その後の支部の運営や活動はどうでしょうか。それ以降、順調でしょうか。

藤原 ● NPO おおさかとの共同体制がずっと続いていて、街路樹研修会をもう8回開き、啓発活動もずっと続けています。

仕事は年によって多い少ないはありますが、やはりマーケットとしての広がりがあるのが実感です。直近だと茨木市からいただいた仕事は大きかったです。こういう動きはありますが、関西の多くの自治体は、ガラパゴス的に診断業務を独自にやっているという印象はずっと変わらないです。その辺の是正ができればいいかなとは思っています。

笠松 ● ちなみにマテック博士講演会以降、一緒にやって来られたNPO おおさかの設立も、きっかけはマテック博士講演会だったのです。藤原さんたちと一緒に、関西の樹木医が集まってマテック博士講演会を準備しました。その準備実行委員会が終わってマテックさんを関空から送り出した後、やれやれと思ったのですが、せっかくここまでやったのだから、これはなにか活動を続けていこうということで発足されたのが、今のNPO おおさか緑と樹木

の診断協会ということで、きっかけは、マテック博士講演会であったということです。

この時期の造園界は本当に一番厳しい時期だったのではないかなと思います。バブル以降ずっと、這い上がれそうで這い上がれないような中に業界全体がいる状況。この国際シンポジウムは、やはりそれなりのインパクトなり、業界にちょっとはアピールしたようなところはあったのでしょうか。

奥本 ● それは間違いなくありましたね。他の団体では1回も国際シンポジウムという話を聞いた覚えがありません。またそういう時期だけに、こういう新たな、ニッチな事業に、ここまで前向きに取り組んでいるのか、大風呂敷広げたな！というインパクトは十分あったと思います。

笠松 ● 国際シンポジウムは無事に開催でき、盛況で、多くの役所の方にもそれなりのアピールはできたと思います。技術的な課題として、長年、根株診断開発に取り組んでいましたが、スマイリーさんが大阪で、長いドリルで根元に穴を開けて、「これでわかるんだ！」と簡単にやられたので、やはりこれしかないよねというような、最終的な後押しをされたと覚えています。

有賀 ● 私も見ていてよく覚えています。長いドリルで、ですね。神庭さんがレジストの刃をドリルにつけて何かやっているのも見たことがあります。

神庭 ● そうですね。手応えだけでレジストの刃を利用していましたので…。

機器診断の機器について

笠松 ● 機器診断の機械のことに触れておきた

と思います。最初にレジストグラフを導入した時は、レジストグラフのMシリーズがスタンダードで、スマイリーさんが来られた頃は、Fタイプが主流になっていたと思っています。

街路樹診断を始めた時は、インパルスハンマーとレジストが二大機種だったと思うのです。そのうちインパルスハンマーが知らないうちになくなってしまいました。インパルスハンマーがなくなった理由、レジストがMからFに変わり、その当時、ピカスなども出だしたと思うので、その頃の機械について簡単に紹介してください。

永石 ●レジストグラフ研究会では、レジストグラフ以前に、実はインパルスハンマーを一所懸命に試験していました。農工大の山の木を渡辺先生と一緒に切り出してきて、もしくは山の中で神庭さんと一緒にインパルスハンマーで計測をして、それが傷んでいるかどうかというのを調べていました。ただ、インパルスハンマーは数値しか出てきませんので数値判断をしなければなりません、評価基準を決めるためにはいろいろなファクター、例えば樹種、木の太さ、水分環境などを入れておかなければなりません。ファクターによっても評価基準が変わります。結局、実際の事業で使ったのは、ごくごく初期のたぶん街路樹診断という名前がつく以前のことで、中野通りや中杉通りで計測したくらいで見切りがつけられたという状況になり、実務応用は非常に難しかったということです。同時期に出ていたレジストグラフのMは波形記録をワックスペーパーに書くだけの初期的な機械ですが、これはそれから以降10年近く使われました。今でも使っている方はいらっしゃると思

います。ただ、ワックスペーパーは消耗品だということや、ギアの噛み合わせによっては、壊れたら直らないという問題が付きまどっていたので、レジストグラフもどんどん変わってきました。2003年頃、MからFシリーズというガンタイプの機械に変わりました。ただこの時には単純に波形記録をとってだけで、まだメモリーはなく、データが蓄積できないタイプでした。2006年ぐらいにメモリーユニットといって、後ろに波形をデータで記録できるユニットが付いたものが出されて、作業性も保守性も良くなり、報告書などに添付する時も、綺麗な情報を添付できるようになりました。それまでは一所懸命、紙焼きコピーをして、紙焼きコピーが仕事の8割を占めるような時期もあったくらいです。そういうものが労力軽減にも関わって、どんどん入ってきた頃にあたります。

2006年ぐらいが、ちょうどいろいろな物事の節目になっています。国土交通省の飯塚さんのところで作られているガンマ線のはしりの機械は2003年ぐらいなのですが2006年ぐらいに、やはりもう少し街路樹とか都市樹木の診断で使ってもらえるようにと、国交省で開発を進めるプログラムを組みたい、どうしたら使い勝手が良くなるかと、いろいろなご質問をいただいて、返した記憶がありますね。実際にツリーガンマシリーズが販売されてもう10年近く、その間、形は変わっていないのですが、そういう機材が出てきた頃です。レジストグラフの現行機PDへの進化は、あと5年ぐらい、2010年ぐらいまで待つことになります。

アーボソニックやピカスなど、他にも音波系の樹木のCT機械がありますが、それらは海

外で開発生産され、たぶん2007年、2008年ぐらいから出回り始めていると思います。一番大きかったことは、パソコンを外に持ち出せるようになったこと。ノートパソコンの普及です。それまではノートパソコンといっても、全然、作業能力がなくて、バッテリーもすぐ切れていたのですが、それが持ち出せるようになり、2007年、2008年ぐらいでちょっと弾みがついてきた状況でした。ただ、導入の最初は皆さん怖いですよ。やはり200万も300万もする機械ですから。ちょっと皆さん及び腰だった。誰かが試さなきゃいけないタイミングだったなどというのは、なんとなく記憶しています。

2009年 法人化、一般社団法人に ボンド博士の講演会

笠松 ● 国際シンポジウムを2008年に開催し2009年には任意団体の街路樹診断協会を解散して法人化しました。その翌年には街路樹診断士資格の導入を始めており、この頃、一気にいろいろなことに取り組んでいます。法人化の意図は何だったのでしょうか。

大島 ● 社会的な活躍の場が広がるにつれて、信用度が大事になっているということで、とにかく、法人化しましょうという話が、事務局のほうに来ていました。

奥本 ● 法人化はこの協会が始まってからの悲願が達成されたという思いです。本当に良かった年という印象ですね。皆さんが手弁当で集まって一所懸命やっている中で、早く法人化をとだいぶきつい言い方をした覚えもあって、その節は大変失礼しました。

笠松 ● 法人化が先だったのですか。それとも

街路樹診断士をしたいがための法人化だったのですか。

大島 ● 法人化が先です。街路樹診断士をしたいではなくて、なにしろ法人化しろというのが先でした。もともと皆さんがそういう事業計画を立てていらっしゃっていて、ただ、それが全然進んでいませんでした。その先に、街路樹診断士もやらなければ、ということがありました。また、法律が変わり一般社団法人を作るのが簡単になったこともあり一気に進んだという感じだったのではないのでしょうか。

松本 ● 前後の時期に日本樹木医会も一般社団法人化しましたね。

笠松 ● 事業年度は街診協は9月始まり、樹木医会は4月で街路樹診断協会のほうが半年早かったと思います。支部から見て、法人化するというのはいかがでしたか。手続きなど何か面倒なことなどありましたか。

松本 ● 本部で全部一括でやってもらったので、何もなかったですね。

笠松 ● 本部事務局の手続きが大変だったろうなと思います。神庭さんともよく話していたことなのですが、任意団体と法人格を持つとは、やはり信頼性や責任性が全然違うので、どこかで法人格を持ちたいという思いがありました。それ以上に奥本さんの強い思いと、大島さんの大変な努力によって成し得たということ。それともう一つは法律の変更があり、進んだということがよくわかりました。さあ、これで法人化できました。この法人化のセレモニーでボンド博士をお招きしました。ボンド博士はどのような経緯でお招きしたのでしょうか。

神庭 ● よく覚えていないのですが、アメリカ

の森林関係の研究者で i-Tree の先駆者だと思います。やはり ISA の雑誌からちょっと探っていたのかなという気はしないでもないです。ただ、お願いするとしたら、やはりスマイリーさん経由でないと直接は繋がらないはずなので、そういったルートだったかなと思います。

笠松 ● 講演タイトル「都市樹木のリスクマネジメントと経済価値の情報管理」を考えたのは有賀さんですね。今ようやく日本で、i-Tree とか言い出されていますが、ボンドさんには、この時に i-Tree の話をさせていただいているのですよ。i-Tree Street だったと思います。世に先んじて、すごいことです。

有賀 ● パンフレットを見てみると、やはり都市樹木を一所懸命売り込んでいるのですね。それで、第 1 部 都市樹木の加重、損傷のアセスメントだとか、都市樹木の情報管理 i-Tree とかですね。ボンドさんの会社も Urban Forestry LLC という会社名なのですね。この辺からどんどんアーバンツリーからアーバンフォレストに移ってきている。それで、2019 年の国際シンポジウムはアーバンフォレストになるわけですけど。その発端であった方がボンドさんだったのだということがわかります。我々のほうはやはり都市樹木をいかに売り込んでいくことで、この段階ではまだアーバンフォレストというものに行き着いてないことがわかります。我々はアーバンツリーとは言っていますが、もうボンドさんの中にはアーバンフォレストという言葉が入ってきています。こういうふうを考えていくと、どんどん、街路樹診断協会は進化していつているのではないかと思います。

ボンドさんと一緒に仙台に行きました。今後、東北支部の設立につなげたい協会の思惑

をもちつつ、自分は街路樹診断の紹介スライドをやったので、それに集中していたように思います。終わった後、仙台の皆さんとケヤキ並木を歩きながら、わいわいやったのが最高に楽しかったのを覚えています。

笠松 ● ありがとうございます。先日、當内さんが ISA で発表されて、それを聞いてボンドさんからメールが届いたという話がありました。街路樹診断協会から當内さんが発表されたことで、わざわざメールをいただけるとはボンドさんも律儀で丁寧な方だと思っています。

神庭 ● 仙台でも講演していただいたのですが、仙台の樹木医さんたちはあまり i-Tree というか、経済価値的なことにはあまりに期待をもってもらえなかったような感じでした。重要な講演に対して仙台では、あまり受け入れてくれなかったと、そういった印象をもちながらボンドさんと一緒に帰った覚えがあります。

永石 ● やはり経済価値の部分での i-Tree の切り出し方が、あの当時はまだ早すぎたのかなというのがありますね。元になるデータをどう集めるかというのが、実は本当は一番大事だったと思うので、そのノウハウを教えてくださいればよかったかなと。ボンドさんも専門分野としては、経済の話をするつもりはなかったはずですが、ただアメリカでの活動の中で、たぶん当時、一番ホットなトピックスを話してくれたようですね。i-Tree の中でも、あの当時、たぶん一番先進的にやっていた部分を、話していただけたのかな。そういう新しい流動を日本に取り入れる窓口協会がなれたのは、よかったのかなと思います。

笠松 ● 事務局はいかがでしたか。

大島 ● 法人化と同時にその式典もやったので、大変忙しかったなという思いしかないのですが、ただ、ボンドさんと奥さんも、目黒の雅叙園の部屋を喜んでいただけたし、東北新幹線で移動し、仙台の天龍閣旅館で食事をして、季節も良かったですし、すごく喜んでいただけたのはよかったかなと思います。

(※天龍閣旅館はコロナ禍のため2021年11月25日廃業)